

【原著】

広島文教女子大学におけるルーブリック評価の導入について

——成果と今後の課題——

今 崎 浩

The Introduction of Assessment Rubrics in Hiroshima Bunkyo Women's University:
Prospects and Problems

Hiroshi Imazaki

1 問題の所在と目的

平成24年8月に公表された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」では、学士課程教育について「これまで我が国の大学は、国際的・歴史的に確立されてきた大学制度の本質に立脚しつつ、国際比較において社会全体から大学への投資が必ずしも十分とは言えない中、知的蓄積への多大な努力を積み重ねてきた。特に、ここ20年の大学改革の取組の中で、我が国の学士課程教育について、改善のための様々な工夫が行われ、多くの進展がなされてきた。」と述べ、授業計画（シラバス）の作成、学生による授業評価、ファカルティ・ディベロップメント（FD）の取組などについて、一定の評価を示しつつも、これからの社会に貢献する人材を育成するため、学士課程教育のさらなる質的転換を求めている。具体的には、学生に授業のための事前の準備、授業の受講や事後の展開を促す教育上の工夫、インターンシップやサービス・ラーニング、留学体験といった教室外学修プログラム等の提供等が挙げられている。ここで、重要なことは大学が学生に対して「何を行ったか」ではなく、教育の丁寧な過程を通して大学が学生に対して「何を身に付けさせ、何をできるようにしたか」が問われていることである。さらに、大学はそれらの結果を踏まえ教育課程を「どのように改善・進化させたのか」が求められており、これらのことは我が国の未来に影響する喫緊の課題であるということである。

そこで、大学が速やかに取り組むことが求められる事項の一つとして挙げられたのが、プログラム共通の考え方や尺度（アセスメント・ポリシー）に則った成果の評価である。実際、本学においても、教育の質を高めるための一つの方法としてGPA制度を導入しているが、橋村（2014）は「科目ごとのGPAのばらつきがみられることがわかる。」、「本来の価値（能力）に対して、評価が不当に高い『Sのインフレ』や、本来の価値（能力）に対して、評価が不当に低い『Sのデフレ』を速やかに解消し、成績評価の標準化を図ってゆかなければならない。」と成果の評価についての問題点を指摘している。

そこで、本稿では学士課程教育の質的転換の要となる成績評価の妥当性・信頼性を高めていくための手法としてルーブリック評価を取り上げ、その導入の実際、成果と課題について述べていくこととする。

2 日本におけるルーブリック評価の導入

2.1 ルーブリック評価とは

ルーブリック評価について、同答申（2013）では「米国で開発された学修評価の基準の作成方法であり、評価水準である『尺度』と、尺度を満たした場合の『特徴の記述』で構成される」と説明している。また、濱名（2012）は「『目標に準拠した評価』のための『基準』つくりの方法論であり、学生が何を学習するのかを示す『評価規準』と学生が学習到達しているレベルを示す『具体的な評価基準』をマトリクス形式で示す評価指標である」と説明している。

これらの説明から同答申で言う「評価水準である『尺度』」とは学生が何を学修するのかを示した「評価規準」、 「尺度を満たした場合の『特徴の記述』」とは学生が学修を通して到達したレベルを示した「評価基準」を指すものと言える。

したがって、ルーブリック評価とは

目標に準拠した評価を行うために、評価規準と評価基準を示した評価指標に基づく評価
と言えるであろう。

なお、評価規準と評価基準の関連について、高浦（2012）は「この評価基準（standard）と分析された目標（criterion）とは、きわめて関連が深いが同じものではない」と述べている。つまり、評価規準とは学生に付けたい力を示した目標や枠であり、評価基準とは学生がどのような学修成果や学修行動を示したら、その評価規準に示された目標や枠を達成することができたかどうかを判断する基準である。例えば、「・・・を分かりやすく説明することができる」という評価規準を設定した場合、「分かりやすく」とはどのような状況なのかは曖昧であり、評価者によって評価の違いを産む恐れがある。そこで「・・・の根拠となる資料を2つ以上示して説明している」といった記述、つまり評価基準が必要となるのである。

2.2 日本の初等・中等教育におけるルーブリック評価の導入の状況

初等・中等教育における活用は、2002年から導入されることとなっていた「総合的な学習の時間」を実施する際に、学校現場の教員がどのように「総合的な学習の時間」に取り組み、どのようにその学習活動を評価したらよいかの情報を提供するために欧米でよく使われているルーブリックによる学習と評価方法を紹介することから始まったと言われている。その後、国立教育政策研究所と学校現場の教員による研究開発が行われ、その成果について、国立教育政策研究所（2005）は「特にルーブリックを作成して授業にのぞむことによって、授業計画が立てやすく、単元途中での指導の改善が容易となり、指導がしやすくなるといった利点を教員側にもたらしていることが示された。また、子どもの側にとっては、学習の目標を持たせることができ、学習意欲が高まるといった効果が指摘されていた。」と述べている。一方、課題としては「総合的な学習の時間においても、教科の授業においても、教員の側にも子どもの側にも有意義である単元指導計画の作成が困難であったと感じた教員も多く、その中でも特にルーブリックの作成には多くの時間を要することが指摘された。」と述べている。さらに、「今後、評価の一層の定着のためには、これらの開発的研究で用いられたフォーマットによる単元指導計画や、総合的な学習の時間の内容系列表の作成が“困難であるが有意義”である状況や、これらの開発的研究に携わった教員だけがそれらの作成手順と活用方法を理解しているという状況を脱する必要がある。そして、これらの開発的研究の成果を広くすべての学校、教員に広めることと同時に、これらの研究に携わった者以外でも内容系列表および単元指導計画、ルーブリックの作成ができるように、研究をさらに発展させ、ノウハウの整理とマニュアルのようなものを整

備することが急務であるといえよう。」とルーブリック評価の導入に向けた取組の方向性を述べている。

しかしながら、2度にわたって学習指導要領が改訂された現在においても目覚ましい改善は見られず、国立教育政策研究所(2011)が作成した「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」では「教師が指導の過程や評価方法を見直して、より効果的な指導が行えるよう指導の在り方について工夫改善を図っていくこと」、「学習評価の妥当性、信頼性等を高めるよう努めること」等、今後一層の評価の工夫改善を求められているのが現状であると言える。

2.3 日本の高等教育におけるルーブリック評価の導入の状況

日本の高等教育におけるルーブリック評価の導入の状況について、中央教育審議会が行った「学士課程教育の現状と課題に関するアンケート調査」(2012)¹⁾において、学生の学修成果を把握する方法として、「導入すべき」または「どちらかと言えば導入すべき」とした肯定的な回答の割合は、学修行動調査等が82.6%、学修ポートフォリオが84.8%であるのに対して、ルーブリック評価については62.7%と20ポイント以上の差が見られる。大学トップである学長ですらこうした結果であることから、学生に直接指導にあたる大学教員のルーブリック評価に対する意識、導入の状況が低調であることは容易に想像ができる。

こうした状況の中で、ルーブリック評価を導入していくためには、それがどのような性格を持つものであるかを明確にしておくことが重要であると考えられる。梶田(2013)は各種評価の基本的性格を次の4つの類型に区分している。

- ① 実態把握
- ② 測定的な性格を持つもの
- ③ 目標達成性の把握という性格を持つもの
- ④ 査定的な性格を持つもの

これら4つの類型は、必ずしも個々の具体的評価活動と1対1の対応関係を持つものではないことは梶田も述べているとおりであるが、本稿で取り上げるルーブリック評価は、設定された目標を学生一人一人が達成しているかどうか、若しくはどの程度達成しているかを把握するためのもので、梶田の基本的性格の「③ 目標達成性の把握という性格」を主たる役割として持たせることとする。

また、沖(2014)が最も留意すべきと述べている次の3点を踏まえることも、ルーブリック評価の導入に当たっては、満たすべき重要な条件であると考えられる。

- ① 到達目標ごとの成績評価(総括的評価)がどのように行われるかが学生に見えること
- ② 成績評価(形成的評価や個々の学習活動の採点)が公平で客観的かつ厳格に行われること
- ③ 学習成果のフィードバックが行われること

これらのことに関わって、Web上に公開された各大学のシラバスを見ると、到達目標ごとの総括的評価がどのような評価方法で行われるのか、その比率はどのような割合が示されていないケース、到達目標を達成できているかどうかを図るための評価方法が適切とは言えないケース、学生へのフィードバックの方法が示されていないケースも多く見られることから重要な条件と言える。

3 ルーブリック評価の導入の実際

ここでは、2を踏まえ本学においてルーブリック評価を導入した実践事例を述べていくこととする。事例とした授業は次のとおりである。

- 授業科目 教育実習 I (教職科目)
- 担当教員 8名
- 対象学生 小学校教諭一種免許状の取得を希望する3年次の学生53名
- 授業形態 実習

3.1 評価規準及び評価方法の設定

前述のとおり、ルーブリック評価を「目標に準拠した評価を行うために、評価規準と評価基準を示した評価指標に基づく評価」としたことから、まず到達目標を設定することがスタートとなる。

ここで設定する到達目標とは、各担当教員が設定するものではない。プログラムとしての学士課程教育という概念に基づいて、大学、学部、学科が教育課程全体を通して、学生にどのような能力を育成し、どのような知識、技術、技能を習得させようしているのかを明確にした上で、その達成に向けて各授業科目が担うべき目標のことである。したがって、教育課程の体系化が図られている大学においては、改めて設定するものではない。本実践では、既に教職課程について指標(目標)と授業科目のマトリクスを作成していることから、それに基づいて到達目標を設定した。

次に、到達目標に照らして、その目標が学生の学修状況として、どのような状況になっているかを具体的に示した評価規準とその評価方法を設定した。それらは表1のとおりである。

なお、評価規準及び評価方法の設定に当たっては、15分間の模擬授業の中で多くの評価規準について判断するのは困難であることが予想されたため、評価規準の数は評価可能であろう数に絞り込んだ。

表1 評価規準と評価方法

評価規準	評価方法
①教材を分析することができる	・学習指導案の記述 ・担当教員による事前指導の際の学生の説明の状況
②教材研究を生かした授業を構想し子どもの反応を想定した学習指導案をまとめることができる	・レポート課題の記述 ・学習指導案の記述
③教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料を開発・作成することができる	・模擬授業で用いた教材・教具
④子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる	・模擬授業の状況
⑤板書や発問、的確な話し方など授業を行う上での基本的な表現の技術を身に付けている	・模擬授業の状況
⑥集団において、他者と協力して課題に取り組むことができる	・協議会の状況 ・振り返りカードの記述

3.2 評価基準の設定

次に、各評価規準で示された学修状況について、学生がどの程度到達しているかを明示するため、文章表記で示した評価基準を4段階で設定した。例えば、評価規準「教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料を開発・作成することができる」の評価基準は次のように設定した。

【レベル4】・本時の目標の達成に向け、適切な教材・資料，教具を用意している
・先行実践等を参考にすると等して、授業者なりの工夫が見られる
(両者を満たす)

【レベル3】・本時の目標の達成に向け、適切な教材・資料，教具を用意している

【レベル2】・教材・資料，教具を用意している

【レベル1】・教材・資料，教具を用意していない

これらをマトリクス形式にまとめたものが表2・表3である。これらを「授業評価表」と呼ぶこととした。

なお、評価基準の設定に当たっては、これまでの同授業の学生の状況、福岡教育大学附属小倉中学校(2006)の「教育実習における教育実習生への授業評価に関する研究」、広島県教育委員会の(2003)の「授業改善のための校内研修ハンドブック」を参考とした。

3.3 授業担当教員による共通理解

同授業は8名の教員が担当するため、授業評価表の内容について共通理解を図っておく必要があると考え、授業担当教員による会議を設けた。

会議では、ルーブリック評価導入の意義、ルーブリック評価(授業評価表)の内容、総括的評価の方法、学生へのフィードバックの方法についての説明の後、協議を行った。協議の内容は評価基準に関する事、評価時期に関する事が中心であった。具体的には、評価基準に関して、各レベルの境目に当たる学修状況が教員から数例挙げられ、それらをどのように判断するかが協議された。また、評価時期に関して、学習指導案の評価を教員の指導前とするのか、指導後とするのか等が協議された。

また、評価の記録について、模擬授業のように学修状況が刻々と変化する場合、表1のような授業評価表に記録することが難しいという意見が出された。そこで、表4のような「記録表」を作成することによって、1回の模擬授業の教師役と児童役の両者の評価を記録し、それらを表5のような「集計表」に転記することとした。

より妥当性・信頼性の高い評価を行っていくためには、こうした会議を設け、教員間の連携を図っていくことが重要であると考えた。

3.4 学生への授業についての説明

第1回の授業において、シラバスに沿った授業のねらいと概要、双方向性確立の方法、授業計画について説明した後、評価について前述の表2「授業評価表(授業者用)」、表3「授業評価表(児童役・レポート等用)」を配付し、評価規準、評価方法、評価基準、評価のフィードバックの方法、総括的な評価について説明を行った。

説明の中では、特に授業評価表を参考にして「何を学習すればよいか」、「どこまで到達できているのか」を把握し、主体的な学修を進めてもらいたいというルーブリック評価の導入の趣旨を強調した。

これまで、本学では卒業時に学生へアンケート調査を行っているが、その中で「自分の評価

表2 授業評価表 (授業者用)

キーワード	評価規準	評価方法	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	評価
1 教材分析力	教材を分析することができ、 車削指導案をまとめることができる	学習指導案の記述 (指導観) 学習指導案の記述 (単元と評価の計画)	教材観に次の事項が記述され、その内容について理解している 1. 学習指導要領の位置付け 2. 単元のねらいと主な学習内容 3. 学習内容の系統性 4. 学習内容のもつ価値、背景 教材観・児童観を踏まえ、学習展開や指導方法の工夫、指導上の留意点等が具体的に記述されている ・ 単元の内容及び評価規準が記述され、適切に設定されている ・ 指導観に記述された内容を踏まえ、単元の計画に工夫が見られる	教材観に次の事項が記述されている 1. 学習指導要領の位置付け 2. 単元のねらいと主な学習内容 3. 学習内容の系統性 4. 学習内容のもつ価値、背景	教材観に次の事項が記述されている 1. 学習指導要領の位置付け 2. 単元のねらいと主な学習内容 3. 学習内容の系統性	教材観に次の事項が記述されていない 1. 学習指導要領の位置付け 2. 単元のねらいと主な学習内容 3. 学習内容の系統性	
2 授業構想力	教材研究を基にした授業を構想し子どもの反応を想定した学習指導案をまとめることができる	学習指導案の記述 (学習過程)	学習過程に次の事項が記述され、1時間の流れが分かる 1. 本時の問題 (資料・教材) 2. 指導者の発問・指示・説明 3. 指導上の留意事項 4. 評価規準・評価方法 ・ 指導観に記述された内容が学習過程に反映されている ・ 1時間の学習の流れが分かる板書計画を作成している ・ 児童の思考を促したり、理解を深めたりするための工夫が見られる	教材観に次の事項が記述され、1時間の流れが分かる 1. 本時の問題 (資料・教材) 2. 指導者の発問・指示・説明 3. 指導上の留意事項 4. 評価規準・評価方法	学習展開や指導方法の工夫、指導上の留意点等が記述されている 単元の内容及び評価規準が記述されている	学習展開や指導方法の工夫、指導上の留意点等が記述されていない	
3 教材開発力	教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料を開発し、作成することができる	模範授業で用いた教材・教具	本時の目標の達成に向け、適切な教材・資料、教具を用意している ・ 先行実践等を参考にすると等して、授業者なりの工夫が見られる ・ 学習規律を守っている児童を褒めたり、学習規律を守る意義を説明したりする等している	本時の目標の達成に向け、適切な教材・資料、教具を用意している	教材・資料、教具を用意している	教材・資料、教具を用意していない	
4 授業展開力	子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる	模範授業の状況	児童の質問を聞き、それに対応している 児童の活動 (意見、表現等) を観察し、それを適切に取り上げ、授業の中で生かしている すべての児童を授業に参加させるため、進んでいる児童、遅れがちな児童それぞれに適切な指導を行っている	児童の質問を聞き、それに対応している 児童の活動 (意見、表現等) を観察し、それを授業の中で生かそうとしている すべての児童を授業に参加させるため、遅れがちな児童に適切な指導を行っている	児童の質問を聞いていない 児童の活動 (意見、表現等) を観察していない 一部の児童で授業を進めている	児童の質問を聞いていない 児童の活動 (意見、表現等) を観察していない	
5 表現技術	板書や発問、的確な話し方など授業を行う上での基本的な表現の技術に付けている	模範授業の状況 (板書)	全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行っている ・ 学年に応じた正しい言葉遣いを行い、内容も簡潔にまとまっている ・ 1時間の学習の流れが分かるように板書している ・ 児童の思考を促したり、理解を深めたりする工夫をしている ※模範授業は20 (15) 分のため、残りの25 (30) 分も想定した黒板の使い方をしている	全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行っている ・ 学年に応じた正しい言葉遣いを行っている	全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行っている	全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行っていない	
							合計

(注1) 学習指導案が模範授業までに提出されなかった場合、配慮すべき理由がなく模範授業が実施されなかった場合は0点とする。
 (注2) 学習指導案は最終的に提出されたもので評価を行う。

表3 授業評価表（児童役・レポート等用）

【授業評価表（課題レポート用）】

キーワード	評価規準	評価方法	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	評価
1 授業構想力	教材研究を生かした授業を構想し子どもの反応を想定した学習指導案をまとめることができる	レポート課題の記述	・期限までに指示された課題を提出している ・模擬授業、教育実習に生かしていることについて記述している	期限までに指示された課題を提出している	期限までに指示された課題を提出していない	指示された課題をすべて提出していない	

【授業評価表（児童用）】

キーワード	評価規準	評価方法	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	評価
1 他者との連携・協力	集団において、他者と協力して課題に取り組むことができる	協議会の状況	・実施された模擬授業について、協議で的確な意見を述べたり、質問をしたりしている ・実施された模擬授業の課題について、改善策を述べている	実施された模擬授業について、協議で的確な意見を述べたり、質問をしたりしている	協議で意見を述べたり、質問をしていない	協議で意見を述べたり、質問をしていない	

【授業評価表（振り返りカード用）】

キーワード	評価規準	評価方法	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1	評価
1 他者との連携・協力	集団において、他者と協力して課題に取り組むことができる	振り返りカードの記述	協議会の内容や担当教員の指導・助言を踏まえ、自らの模擬授業に生かしていきたいことについて記述している	自らの模擬授業に生かしていきたいことについて記述している	模擬授業のよい点や改善点について、記述している	振り返りを記述している	

（注）事前課題が全く提出されなかった場合、配慮すべき理由がなく模擬授業に参加しなかった場合は0点とする。

表4 記録表

月 日 () () グループ

【授業者】

キーワード	評価規準	評価方法	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
3 教材開発力	教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料を開発・作成することができる	模擬授業で用いた教材・教具	4	3	2	1
4 授業展開力	子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる	模擬授業の状況	4	3	2	1
		模擬授業の状況	4	3	2	1
		模擬授業の状況	4	3	2	1
		模擬授業の状況	4	3	2	1
5 表現技術	板書や発問、的確な話し方など授業を行う上での基本的な表現の技術を身に付けている	模擬授業の状況（発問、指示、説明）	4	3	2	1
		模擬授業の状況（板書）	4	3	2	1

【児童名】

キーワード	評価規準	評価方法	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
1 他者との連携・協力	集団において、他者と協力して課題に取り組むことができる	協議会の状況	4	3	2	1

【児童名】

キーワード	評価規準	評価方法	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
1 他者との連携・協力	集団において、他者と協力して課題に取り組むことができる	協議会の状況	4	3	2	1

【児童名】

キーワード	評価規準	評価方法	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
1 他者との連携・協力	集団において、他者と協力して課題に取り組むことができる	協議会の状況	4	3	2	1

表 5 集計表
氏名

キーワード	評価規準	レベル 4	レベル 3	レベル 2	レベル 1
1 教材分析力	教材を分析することができる	教材観に次の事項が記述され、その内容について理解している 1 学習指導要領の位置付け 2 単元のねらいと主な学習内容 3 学習内容の系統性 4 学習内容のもつ価値、背景 教材観・児童観を踏まえ、学習展開や指導方法の工夫、指導上の留意点等に具体的に記述されている ・単元の内容及び評価規準が記述され、適切に設定されている ・指導観に記述された内容を踏まえ、単元の計画に工夫が見られる ・学習過程に次の事項が記述され、1時間の流れが分かる 1 本時の問題 (資料・教材) 2 指導者の発問・指示・説明 3 指導上の留意事項 4 評価規準・評価方法 ・指導観に記述された内容が学習過程に反映されている ・1時間の学習の流れが分かる板書計画を作成している ・児童の思考を促したり、理解を深めたりするための工夫が見られる ・本時の目標の達成に向け、適切な教材・資料、教具を用意している ・先行実践等を参考にしている ・授業者なりの工夫が見られる	教材観に次の事項が記述されている 1 学習指導要領の位置付け 2 単元のねらいと主な学習内容 3 学習内容の系統性 4 学習内容のもつ価値、背景 学習展開や指導方法の工夫、指導上の留意点等が具体的に記述されている 単元の内容及び評価規準が記述され、適切に設定されている 1 単元の内容 2 評価規準・評価方法 学習過程に次の事項が記述され、1時間の流れが分かる 1 本時の問題 (資料・教材) 2 指導者の発問・指示・説明 3 指導上の留意事項 4 評価規準・評価方法	教材観に次の事項が記述されている 1 学習指導要領の位置付け 2 単元のねらいと主な学習内容 3 学習内容の系統性 学習展開や指導方法の工夫、指導上の留意点等が記述されている 単元の内容及び評価規準が記述されている	教材観に次の事項が記述されていない 1 学習指導要領の位置付け 2 単元のねらいと主な学習内容 3 学習内容の系統性
2 授業構想力	教材研究を生かした授業を構想し子どもへの応を想定した学習指導案をまとめることができる	教材研究を生かした授業を構想し子どもへの応を想定した学習指導案をまとめることができる	教材研究を生かした授業を構想し子どもへの応を想定した学習指導案をまとめることができる	教材研究を生かした授業を構想し子どもへの応を想定した学習指導案をまとめることができる	教材研究を生かした授業を構想し子どもへの応を想定した学習指導案をまとめることができる
3 教材開発力	教科書にある題材や單元等に応じた教材・資料を開発・作成することができる	教科書にある題材や單元等に応じた教材・資料を開発・作成することができる	教科書にある題材や單元等に応じた教材・資料を開発・作成することができる	教科書にある題材や單元等に応じた教材・資料を開発・作成することができる	教科書にある題材や單元等に応じた教材・資料を開発・作成することができる
4 授業展開力	子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる	子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる	子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる	子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる	子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる

キーワード	評価基準	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1				
5	表現技術 板書や発問、的確な話し方など授業を行う上での基本的な表現の技術を身に付けている	・全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行っている ・学年に応じた正しく分かったりやすい言葉遣いで行い、内容も簡潔にまとまっている ・1時間の学習の流れが分かるように板書している ・児童の思考を深めたりする工夫をしている ※模擬授業は20(15)分の想定し、残りの25(30)分も想定した黒板の使い方をしている	・全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行っている ・学年に応じた正しく分かったりやすい言葉遣いで行っている	・全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行っている 学習課題(本時に児童が考えること、活動すること)を板書している	・全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行うことができる 学習課題(本時に児童が考えること、活動すること)を板書していない	0	0	0	0

児童

1	他者との連携・協力	・実施された模擬授業について、協力的な意見を述べたり、質問をしたりしている ・実施された模擬授業の課題について、改善策を述べている	・実施された模擬授業について、協力的な意見を述べたり、質問をしたりしている	・実施された模擬授業について、協力的な意見を述べたり、質問をしたりしている	・実施された模擬授業について、協力的な意見を述べたり、質問をしたりしていない				
---	-----------	----------------------------------------------------------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	----------------------------------------	--	--	--	--

課題レポート

1	授業構想力	教材研究を生かした授業を構想し子どもの反応を想定した学習指導案をまとめることができる	・期限までに指示された課題を提出している ・模擬授業、教育実習に生かしてきたことについて記述している	・期限までに指示された課題を提出している	・期限までに指示された課題を提出していない				
---	-------	--------------------------------------------	-------------------------------------------------------	----------------------	-----------------------	--	--	--	--

振り返りカード

1	他者との連携・協力	・グループにおいて、他者との協力を取り組むことができる	・協議会の内容や担当教員の指導・助言を踏まえ、自らの模擬授業に生かしたいことについて記述している	・自らの模擬授業に生かしたいことについて記述している	・自らの模擬授業のよい点や改善点について、記述している				
---	-----------	-----------------------------	--------------------------------------------------	----------------------------	-----------------------------	--	--	--	--

計	0	0	0	0	0	0	0	0	0
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

に納得がいかない。どのようにして評価しているのか」、「今後、何を頑張ったらよいか分からない」といった学生の声が聞かれることがあった。また、我々教員も卒業研究等の複数の教員が授業を担当する科目については、「自分が担当する学生だけ厳しく評価するのは申し訳ない」という想いを潜在的に持ちつつ、成績評価を行っていたことを否定することはできない。

こうした状況を改善するためにも、学生に評価規準や評価方法等について説明を行うこと、教員同士が担当する授業の評価について共通理解を図っておくことが重要であると考える。

3.5 学生への学修成果のフィードバック

同授業では、学生を8つのグループに分け、各グループが国語、社会、算数、理科、音楽、図画工作、体育、道徳の8つの教科等の模擬授業をローテーションで行うこととしている。また、各回の授業は「1 模擬授業 2 模擬授業についての協議 3 担当教員による指導・助言 4 振り返り」という流れで進めている。

表6 模擬授業評価票

項目	評価規準	評価者			
		レベル 4	レベル 3	レベル 2	レベル 1
1	・本時の目標の達成に向け、適切な教材・資料、教具を用意している ・先行実践等を参考にすると等して、授業者なりの工夫が見られる	4	3	2	1
2	・学習規律について毅然とした態度で指導している ・学習規律を守っている児童を褒めたり、学習規律を守る意義を説明したりする等している	4	3	2	1
3	児童の質問を聞き、それに的確に対応している	4	3	2	1
4	児童の活動（意見、表現等）を観察し、それを適切に取り上げ、授業の中で生かしている	4	3	2	1
5	すべての児童を授業に参加させるため、進んでいる児童、遅れがちな児童それぞれに適切な指導を行っている	4	3	2	1
6	・全員に聞こえる声で、発問、指示、説明等を行っている ・学年に応じた正しく分かりやすい言葉遣いで言い、内容も簡潔にまとまっている	4	3	2	1
7	・1時間の学習の流れが分かるように板書している ・児童の思考を促したり、理解を深めたりする工夫をしている	4	3	2	1
【 さんへ】					

学生への学修成果のフィードバックは、次の2つの方法で行うこととした。

- ① 担当教員による指導・助言
- ② 学生による相互評価

①については、「3 担当教員による指導・助言」の時間を使って、授業評価表に基づき、授業者個人として最も到達度が高かった評価規準、最も到達度が低かった評価規準について、それぞれ判断の材料となった模擬授業の具体的な状況を挙げながらコメントすることによって、フィードバックするようにした。

また、授業内で十分にフィードバックできなかった場合には、授業外の時間を使って個別にフィードバックを行った。

②については、「4 振り返り」の時間を使って、児童役の学生が教師役の学生に対して表6のような「模擬授業評価票」に評価を記述し、その票を手渡すといった方法で行った。

4 ルーブリック評価導入・活用の成果と課題

4.1 ルーブリック評価導入・活用の成果

(1) 評価の妥当性・信頼性の向上

本学では授業の成績評価を「秀」「優」「良」「可」「不可」の5段階で評価している。図1は同授業のルーブリック評価導入前（2013年度）の成績評価とルーブリック評価導入後（2014年度）の成績評価の分布を表したものである。

これを見ると、導入後「秀」の人数が減り、「優」「良」「可」の人数が増えていることが分かり、「Sのインフレ」の状況は改善されたと思われる。しかし、「秀」の人数が減ったことをもって、適切な成績評価が行われたとは言い難い。

そこで、同授業の成績評価と各教育実習校における教育実習の評価の比較を行い、評価の妥当性・信頼性について検討してみることにした。

本学では、教育実習の評価について、各教育実習校に「A：実習生として優れている」「B：実習生として努力した」「C：いまだ少し積極的な実習への取り組みが望まれる」「D：実習の効果が全く見られない」の4段階での評価²⁾を依頼している。ここでは、同授業の成績評価と各教

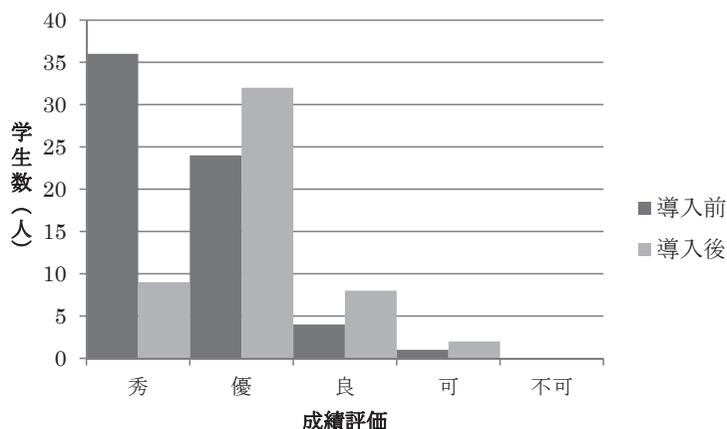


図1 ルーブリック評価導入前（2013年度）と導入後（2014年度）の成績評価の分布

広島文教女子大学におけるルーブリック評価の導入について

育実習校における教育実習の評価の比較するため、両者の評価を次のように整理し、それをまとめたものが表7、図2である。

- ・同授業の成績評価「秀」「優」を実習校の評価「A」に相当するとして「十分満足」
- ・同授業の成績評価「良」「可」を実習校の評価「B」に相当するとして「概ね満足」
- ・実習校の評価「C」は「不十分」

これを見ると、ルーブリック評価導入前の同授業の成績評価、つまり大学の評価に対して、各教育実習校は学生の状況を低く評価していることが分かる。さらに、「十分満足」の60人のうち「秀」と判断した学生が37人いることを考えると、大学の評価が甘かった、若しくは教育実習校は大学が考える以上に高いレベルを教育実習生に求めていると言え、評価の妥当性・信頼性を十分に確保できていなかったと言わざるを得ないであろう。

次に、ルーブリック評価を導入した2014年度の結果は表8、図3のとおりである。

これを見ると、ルーブリック評価導入後の同授業における成績評価、つまり大学の評価と、各教育実習校の評価にほとんど違いがなくなっていることが分かる。

このことから、各教育実習校が教育実習生に対して求めている資質や能力、態度について、

表7 同授業の成績評価と各教育実習校の評価³⁾ (2013年度)

同授業の成績評価		各教育実習校の評価				同授業の成績評価		各教育実習校の評価	
秀	36	A		➔	十分満足	60	48		
優	24				概ね満足	6	17		
良	5	B	17		不十分	0	1		
可	1	C	1	(単位：人)					

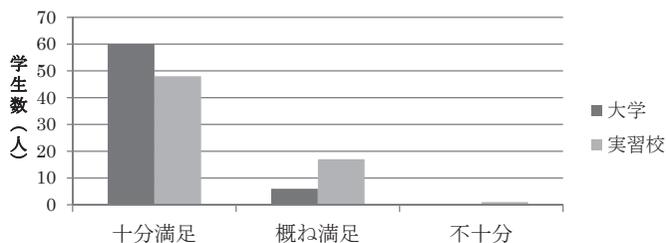


図2 導入前の同授業の成績評価と各教育実習校の評価の比較 (2013年度)

表8 同授業の成績評価と各教育実習校の評価 (2014年度)

同授業の成績評価		各教育実習校の評価				同授業の成績評価		各教育実習校の評価	
秀	9	A		➔	十分満足	41	39		
優	32				概ね満足	10	12		
良	8	B	12		不十分	0	0		
可	2	C	0	(単位：人)					

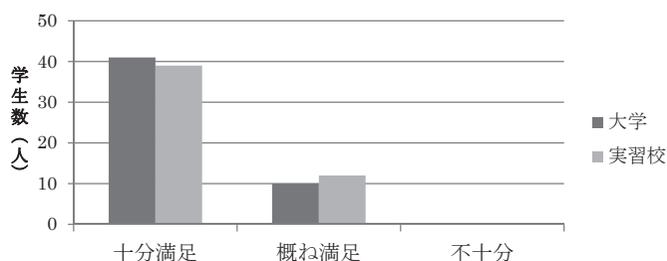


図3 導入後の同授業の成績評価と各教育実習校の評価の比較 (2014年度)

大学と各教育実習校が設定している状況に大きな差が見られないという点において、評価の妥当性・信頼性は高まったと言えるであろう。

(2) 指導内容の明確化

ルーブリック評価導入前の同授業は学生が行う模擬授業について、担当教員が10段階で評価を行っていた。その際に、模擬授業の何を観て判断するのか、模擬授業を行うにあたって作成する学習指導案は評価の対象とするのかどうか等、評価規準や評価方法等について各授業担当教員の判断に任せられているところがあり、不明瞭な部分が多かった。

ルーブリック評価導入後は、評価規準及び評価方法、評価基準を具体的に記述した授業評価表を作成したことによって、模擬授業において何を観察しどのように判断したらよいか、事前に作成する学習指導案の記述内容についてどのように判断したらよいか等が明らかになった。

このように、指導者の立場から考えると、この授業において何を指導すればよいか、すなわち、授業のゴールが明確になり、そのゴールに向かってよりの確かな指導を行うことができるようになったことは成果と言えよう。

(3) 指導の改善を図るべき事項の明確化

評価の意義の一つとして、授業担当教員の指導の改善を図ることが挙げられる。

このことに関わって、授業評価表のレベル4を4点、レベル3を3点、レベル2を2点、レベル1を1点として、各評価規準の平均値を表したものが表9である。

これを見ると、6つの評価規準の中では「教材研究を生かした授業を構想し子どもの反応を想定した学習指導案をまとめることができる」「教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料を開発・作成することができる」のような授業前の準備に関することについては到達度が高いことが分かる。

一方で「子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる」のような

表9 各評価規準の平均値

評価規準	平均値
教材を分析することができる	3.2
教材研究を生かした授業を構想し子どもの反応を想定した学習指導案をまとめることができる	3.3
教科書にある題材や単元等に応じた教材・資料を開発・作成することができる	3.3
子どもの反応を生かし、皆で協力しながら授業を展開することができる	2.9
板書や発問、的確な話し方など授業を行う上での基本的な表現の技術を身に付けている	3.0
集団において、他者と協力して課題に取り組むことができる	3.2

実際の授業場面での対応に関することについては到達度が低いことが分かる。このことについて、さらに詳しく見ると、学習規律の指導に関すること、個に応じた指導に関することの到達度が低いことが分かった。

これらの事項については、次年度以降の同授業の他、各教科教育法、生徒指導に関する授業において授業内容、授業方法の改善を図っていく必要がある。

このように、授業担当教員にとって指導の改善を図るべき事項がより明確になったことは成果と言える。

4.2 ルーブリック評価の導入の課題

(1) 学生の学修状況の把握

ルーブリック評価の導入の最終的な目的は、学生が「何を学習すればよいか」、「どこまで到達できているのか」を把握することによって、主体的な学修を進めていくことができるようにすることである。また、このことが社会の要請に対して応えることになるを考える。

本実践において、授業内の学修状況についてはこれまでに比べ、把握できるようになったが、授業外の学修については十分に把握することができなかった。

(2) 評価規準及び評価方法、評価基準の改善

同授業終了後、授業担当教員で同授業の成績評価について検討する会議を行い、次のような意見が出された。

- ・学習指導案のどの記述をもって判断すればよいか、授業によって評価の場面がない場合にどうしたらよいか等、評価方法について不十分な点が見られた。
- ・評価時期について、学生の能力や取組の過程を反映していないのではないと思われる場合が見られた。
- ・総括的評価について、その結果と実際の学生の学修状況とが整合していないのではないと思われる場合が見られた。
- ・もっと効率的な方法に改善する必要がある。

以上のとおり、評価規準及び評価方法、評価基準については、今後さらなる改善が必要であろう。

(3) 学生への効果的なフィードバック

本実践では、学生へのフィードバックとして、担当教員による指導・助言と学生による相互評価の二つの方法を用いたが、特に前者については口頭で伝えることが中心となった。

学生が授業後の振り返りを十分に行うためにも、教員も評価が記述されたものを配付するほうが望ましいと考える。

そのためには、学生の事前・事後学修の時間を確保することと併せて、教員にも十分な教育活動を行うことができるような時間確保が必要であろう。

5 まとめ ～ルーブリック評価の導入の道筋～

4で述べたようにルーブリック評価を導入することによって、評価の妥当性・信頼性が高まったこと、指導内容が明確になったこと、指導の改善を図るべき事項が明確になったことが成果として見られたが、評価規準及び評価方法、評価基準や学生へのフィードバックの方法については、今後も改善を図っていかなくてはならないという課題も残された。

また、他の授業においてもルーブリック評価を導入していくためにはより汎用性の高いルー

ブリック評価について研究・実践を進めていく必要がある。

そこで、今後の研究・実践の一助とするため、3において述べてきたルーブリック評価の導入の道筋を整理することによって本稿のまとめとしたい。

<p>1 到達目標の設定</p> <p>大学、学部、学科が教職課程全体を通して育成しようとしている能力、習得させようとしている知識、技術、技能を踏まえ、各授業科目が担う目標を到達目標とする。</p>
<p>2 評価規準及び評価方法の設定</p> <p>到達目標に照らして、その目標が学生の学修状況として、どのような状況であるかを具体的に記述したものを評価規準として設定する。</p> <p>また、その評価規準の達成状況を判断する方法として、適切かつ評価可能な方法を設定する。</p>
<p>3 評価基準の設定</p> <p>各評価規準で示された学修状況について、学生がどの程度到達しているかを数段階に分け、記述したものを評価基準として設定する。</p> <p>設定にあたっては、これまでの学生の学修状況、先行研究等を参考とする。</p> <p>2、3の内容を授業評価表としてマトリクス形式にまとめる。また、授業の形態が演習、実習、実技の場合は、評価を記録する方法を工夫する。</p>
<p>4 授業担当教員による共通理解</p> <p>複数の教員が授業を担当する場合は、授業評価表（評価規準及び評価方法、評価基準）について教員間での共通理解を図る。その際に、評価の時期、評価基準の各レベルの境目等について十分に検討しておく必要がある。</p>
<p>5 学生への授業評価（評価規準及び評価方法、評価基準）についての説明</p> <p>学生自身が「何を学修すればよいか」、「自分はどこまで到達できているのか」を把握できるよう説明を行い、教員と学生の間での共通理解を図る。</p>
<p>6 学生への学修成果のフィードバック</p> <p>学生への学修成果のフィードバックを行う。その方法は授業の形態、受講者数等によって工夫をする必要がある。</p>

本学においては、ルーブリック評価の導入は始まったばかりである。学生が「何を学習すればよいか」、「どこまで到達できているのか」を把握しながら、主体的な学修を進めていくことができる評価となるよう今後さらに実践・研究を積み重ねていく必要がある。

謝 辞

本実践を進めるにあたっては、教育実習Ⅰの授業を担当された広島文教女子大学人間科学部初等教育学科の岡利道先生（国語科担当）、村上典章先生（社会科担当）、高橋泰道先生（理科担当）、大野内愛先生（音楽科担当）、佐伯育郎先生（図画工作科担当）、川西正行先生（体育科担当）、徳本達夫先生（道徳の時間担当）から貴重な御指導・御助言をいただきました。とりわけ、佐伯育郎先生には学生への説明時間の確保、成績評価の取りまとめ等、様々な御支援をいただきました。

この場を借りて感謝の意を表します。

広島文教女子大学におけるルーブリック評価の導入について

注

- 1) 平成24年5～6月に各大学の学長を対象に実施した標記のアンケート調査の単純集計結果を、%または項目毎の回答件数で表したものである。(回答件数：684, 回収率：約91%)
- 2) 教育実習の成績評価については、教育実習校の評価だけでなく、実習後の振り返り等を加えることとしているため、ここでは「評価」という表現を用いている。
- 3) 本学では、教育実習Ⅰの単位を修得できなかった学生は教育実習を履修できないこととしているため、不可(D)の欄は省いている。また、各教育実習校における評価が「D」であった学生は0人であったため、Dの欄は省いている。

引用・参考文献

- 中央教育審議会（2012）, 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」。
- 濱名篤（2012）, 「ルーブリックを活用したアセスメント」, 中央教育審議会高等学校教育部会配付資料, www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/.../047/.../1328509_05.pdf.
- 橋村勝明（2014）, 「GPAの実効化に向けた方法試案—広島文教女子大学の実態調査を通して—」, 広島文教女子大学教職センター年報2014年第2号, p. 2.
- 国立教育政策研究所（2005）, 「授業及び評価に関する開発的研究の評価—研究協力校教員への質問紙調査を通して—」, <http://www.nier.go.jp/shochu/seika/ev17/17ev3.pdf>, p. 17.
- 高浦勝久（2012）, 「絶対評価とルーブリックの理論と実際」, 黎明書房.
- 国立教育政策研究所（2011）, 「評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料（小学校 算数）」, http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/03_sho_sansu.pdf.
- 梶田叡一（2013）, 「教育評価」, 有斐閣双書, pp. 4-6.
- 沖 裕貴（2014）, 「大学におけるルーブリック評価導入の実際—公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して—」, 立命館高等教育研究第14号, pp. 80-81.
- 福岡教育大学付属小倉中学校（2006）, 「教育実習における教育実習生への授業評価に関する研究」, <https://www.fukuoka-edu.ac.jp/education/pdf/9sanbongi.pdf>.
- 広島県教育委員会（2003）, 「授業改善のための校内研修ハンドブック」。

—平成27年1月31日 受理—